

【研究報告】

## 看護学生のボランティア活動と自己実現との関連、 及び自己実現に影響する要因の検討

河野保子<sup>1)</sup>, 上西孝明<sup>1)</sup>, 河野理恵<sup>2)</sup>, 村岡由佳里<sup>1)</sup>, 眞鍋瑞穂<sup>1)</sup>, 永江真弓<sup>1)</sup>,  
上西加奈<sup>1)</sup>, 大羽詩織<sup>1)</sup>, 岡多枝子<sup>1)</sup>, 奥田泰子<sup>1)</sup>, 朝田法彦<sup>1)</sup>, 大亀佐織<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 人間環境大学松山看護学部

<sup>2)</sup> 目白大学人間学部

### 【要旨】

【目的】本研究は、看護学生のボランティア活動の実態を把握するとともに、その体験活動がライセンス取得や自己実現にどのような影響を及ぼしているかを明らかにした。【方法】質問紙による実態調査と聞き取り調査で、調査内容は、ボランティア活動の有無、自己実現尺度などの5つの尺度やボランティアへの参加動機・意義等であった。対象者は看護を学んでいる大学一年生で、実態調査55名、聞き取り調査8名であった。【結果】看護学生は、小中高、及び大学を通してボランティア活動を1回でも経験したことがある者は40名(72.3%)であったが、大学生になって、ボランティア活動を経験している者は11名(20.0%)であった。学生の向社会的行動尺度、援助規範意識尺度の平均点は、一般学生と比較して高い値を示した。【考察】本研究においてボランティア活動は、向社会的行動や援助規範意識の醸成、及び自己実現(自己成長)につながっていたため、看護教育課程においても可能な限りボランティア活動の推進は重要であると考えられる。

キーワード：ボランティア活動、看護学生、自己実現

### I. 緒言

中央教育審議会による「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」の答申(平成14年)および「今後の青少年の体験活動の推進について」の答申(平成25年)により、青少年が多様な体験を重ね、豊かな人間形成と将来の社会参加の基盤作りのための奉仕活動・体験活動を行うことが積極的に推進され、勤労観と職業観の醸成や社会的あるいは職業的自立に必要な力の育成が重視されてきた。このような背景のもと、ボランティア活動・体験活動を経験した子ども達は、その延長線上に大学教育を視野に入れ、大学入試においてはインセンティブとして、ボランティア活動・体験活動が評価されている。

看護師・保健師の育成教育機関である看護学部は、免許取得を目的とする。それゆえ4年間、大学教育としての一般教育や専門基礎科目、専門科目を学修し、看護の知識・技術、理論に立脚した問題解決能力と対人関係能力等を修得して、保健・医療施設等に就職する。それに対し、免許取得を目的としていない一般学部生の就職活動においては、一般企業から学生会、ボランティア、およびクラブ活動等を正課外の活動として求められることが多い。大学における体験活動が一般企業から評価されていることを窺い知ることができるが、看護教育機関においてボランティア活動・体験活動を積極的に推し進める必要性・意義をどのように考えればよいのであろうか。

妹尾(2008)は、福祉系専門学校生を対象に、ボランティア活動を体験した学生は、「自己報酬感」、「愛他的精神の高揚」、「人間関係の広がり」の3つの援助成果を得ていることを明らかにした。また、橋本ら(2004)は、ボランティア活動に参加した大学生に対して質的研究を行い、「ボランティア - 自己実現」という関連を見出し、ボランティア活動による内面的充足を強調している。しかしながら、看護学生におけるボランティア活動に関する研究報告はほとんどない。

看護の基礎教育課程での学修は、専門職者育成としての視点で設定された学びである。一方、ボランティア活動は能動的な学びであり、一般社会の現実(高齢者・障害者の生活支援、災害被災者支援等)に対処しながら、ボランティア個人が問題発見力と問題対処能力を育成して、思考や理解の基盤を構築、その活動を通じて幅広い知識と生き方を学ぶ。その結果、ボランティア個人に社会性・人間性・価値観・自発性が醸成されるといえる。このような学びは両者とも重要であり、ライセンス学部である看護教育においても可能な限りボランティア活動に参加する学生の支援をすべきであると考えられる。

本研究では、学生のボランティア活動の実態を把握・分析するとともに、その体験活動が免許取得や自己実現にどのような影響を及ぼすかを明らかにし、看護学部の大学教育におけるボランティア活動あるいは体験活動を位置づける基礎的な資料を提供することを目的とする。

## II. 用語の定義

1. ボランティア活動：「人間性に基づく自発性、主体性をもった活動であり、他から強制されたり義務として行ったりするのではなく、個人の自由意思で行う活動」とする。また、その活動は「社会性・連帯性をもち、支えあい学びあい、充実感や楽しさを自覚できる活動でもあり、経済的な報酬を求めものではなく、社会で今、何が求められているのかを考えながら、より良い社会を自分たちで創りだそうとする活動」とする。
2. 自己実現：各人が自分自身になる過程であり、その人自身の心理的特徴や、自分の可能性を十分に伸ばす過程を意味する。

## III. 方法

### 1. 研究対象、及び研究方法

看護学部1年生に対して、同一時間内において一斉に質問紙による調査を行った。質問紙は無記名で回収し、個人が特定されないように配慮した。調査所要時間は約20分であった。また、ある病院のボランティア活動としてハンドベル・クリスマスコンサートに参加した学生に対して、約30分の個別インタビューによる面接を実施した。インタビューはプライバシーを確保して実施した。調査で得られた資料はID化した番号で管理し、個人が特定されないようにした。

### 2. 質問紙による研究（量的研究）

#### ①ボランティア活動に関する基本的項目

性別、年齢、小中高におけるボランティアの活動経験の有無とその内容、現在行っているボランティア経験の有無と内容、ボランティア活動に対する動機などから構成した。

#### ②自己実現尺度

今田（1993）によるA.H.マズローが示唆した自己実現者の特徴を参考に、研究者らが新たに質問項目を作成した。質問項目は「自己中心的であるよりも問題中心的である」などの11項目からなり、5件法で問い、得点の高い方が自己実現者としての特徴を有していることを意味した。

#### ③特性的自己効力感尺度（成田・下仲・中里ら、1995）

質問項目は「自分が立てた計画はうまくできる自信がある」などの23項目からなり、5件法で問い、得点が高いほど自己効力感が高いことを意味した。

#### ④自尊感情尺度（山本・松井・山成、1982）

質問項目は「少なくとも人並みには価値のある人間である」などの10項目からなり、5件法で問い、得点が高いほど自尊感情が高いことを意味した。

#### ⑤向社会的行動尺度（菊池、1988）

質問項目は「列に並んでいて、急ぐ人のために順番をゆ

ずる」などの20項目からなり、5件法で問い、得点が高いほど向社会的行動を有していることを意味した。

#### ⑥援助規範意識尺度（箱井・高木、1987）

質問項目は「人が困っている時には自分がどんな状況であろうとも助けるべきである」などの29項目からなり、5件法で問い、得点が高いほど援助規範意識を有していることを意味した。

### 3. 面接による研究（質的研究）

面接は、インタビューガイド：「参加動機」、「社会貢献意識」、「ボランティア活動の価値」を用いて実施した。

### 4. 分析方法

質問紙による研究は、記述統計量を算出し、ボランティア経験の有無ごとに各種要因について1要因の分散分析を行った。さらに、各尺度間の関係を見るためにピアソンの相関分析を行った。面接による研究は、得られたデータを意味ある内容として抽出した。

## IV. 倫理的配慮

看護学部の研究倫理審査委員会の承認を受けた（研究実施許可番号2017M-002）。看護学生に対して、本研究の目的・方法・情報の守秘義務・学会等での発表について文章で説明を行い、同意書に署名を得た。研究への参加は自由であること、拒否・途中辞退も不利益がないことを説明した。すべてのデータの管理は、施錠できるキャビネット内に厳重に保管した。

## V. 結果

### 1. 分析対象者の属性

看護学部1年生の分析対象者（学生と略）は55名であった。性別は男性18名（32.7%）、女性37名（67.3%）であり、年齢は平均19.2歳（標準偏差：1.1、範囲：18 - 25歳）であった。

### 2. 学生のボランティア活動の有無と実際

1) 学生が小、中、高および大学を通して、ボランティア活動を1回でも実施したことがある者は40名（72.3%）で、男性11名（27.5%）、女性29名（72.5%）であった。

2) 大学において、現在ボランティア活動を行っている、あるいは行ったことがある者は11名（20.0%）であった。その活動内容は、ペットボトルのキャップ集めやデイサービスで子どもたちと遊ぶなどであった。

### 3. 調査に用いた尺度の検討と学生の心理・社会的側面の把握

#### 1) 尺度の検討

特性的自己効力感尺度については「そう思う」を5点、「そう思わない」を1点、自尊感情尺度、自己実現尺度に

については「あてはまる」を5点、「あてはまらない」を1点、向社会的行動尺度に関しては「いつもした」を5点、「したことがない」を1点、援助規範意識尺度については「非常に賛成する」を5点、「非常に反対する」を1点として段階尺度を得点化した。

調査に用いた尺度を検討するために、特性的自己効力感尺度、自尊感情尺度、自己実現尺度、向社会的行動尺度、援助規範意識尺度について主成分分析を行った。その結果、すべての尺度において1因子構造を確認することができたため、1つの因子をそのまま尺度として用いた。また各尺度における $\alpha$ 係数は、

特性的自己効力感尺度 ( $\alpha = 0.83$ )、自尊感情尺度 ( $\alpha = 0.78$ )、自己実現尺度 ( $\alpha = 0.67$ )、向社会的行動尺度 ( $\alpha = 0.92$ )、援助規範意識尺度 ( $\alpha = 0.85$ ) であり、

調査に用いる尺度としての信頼性が確認された。

## 2) 学生の心理・社会的側面の状況

各尺度の項目ごとの得点を合計したものを各尺度得点とした。学生の心理・社会的側面の状況の平均合計得点の結果は表1の通りであった。

学生の特性的自己効力感尺度得点は  $69.5 \pm 11.1$  であり、

心理測定尺度集Iにまとめられた先行研究における18～24の年齢群の男性73.7、女性76.4と比べて低かった。学生の自尊感情尺度得点は  $28.3 \pm 6.1$  で、内田ら(2010)が大学生に行った調査結果  $25.1 \pm 4.6$  と比べて低かった。学生の自己実現尺度得点は、筆者らが独自に作成したものであり、 $37.6 \pm 4.9$  であった。次に学生の向社会的行動尺度得点は  $58.5 \pm 17.0$  で、菊地(1988)が示す大学生の一般的な合計得点(男性53.1、女性56.9)と比較すると高かった。学生の援助規範意識尺度得点は  $103.5 \pm 11.8$  であった。なお、援助規範意識尺度は4つの下位尺度で論じることができ、本調査の結果を下位尺度で得点化すると、返済規範意識尺度得点の平均は  $3.7 \pm 0.5$ 、自己犠牲規範意識尺度得点の平均は  $3.5 \pm 0.5$ 、交換規範意識尺度得点の平均は  $3.4 \pm 0.5$ 、弱者救済規範意識尺度の得点の平均は  $3.6 \pm 0.5$  であった。これらの得点は、柴田ら(2007)の報告(返済規範意識尺度得点:  $3.5 \pm 0.5$ 、自己犠牲規範意識尺度得点:  $3.5 \pm 0.5$ 、交換規範意識尺度得点:  $3.2 \pm 0.5$ 、弱者救済規範意識尺度:  $3.6 \pm 0.4$ )と比較すると、いずれも高かった。

## 3) 各尺度間の相関

各尺度間の相関は表2の通りであった。

表1 学生の心理・社会的状況 (mean  $\pm$  S.D.)

	特性的自己効力感	自尊感情	自己実現	向社会的行動	援助規範意識
男性 (n=18)	67.7 ( $\pm$ 14.5)	28.8 ( $\pm$ 7.1)	37.9 ( $\pm$ 6.5)	54.4 ( $\pm$ 21.2)	102.3 ( $\pm$ 10.9)
女性 (n=37)	70.4 ( $\pm$ 9.2)	28.1 ( $\pm$ 5.7)	37.4 ( $\pm$ 4.0)	60.5 ( $\pm$ 14.5)	104.1 ( $\pm$ 12.3)
N=55	69.5 ( $\pm$ 11.1)	28.3 ( $\pm$ 6.1)	37.6 ( $\pm$ 4.9)	58.5 ( $\pm$ 17.0)	103.5 ( $\pm$ 11.8)

表2 ピアソンの相関分析による各尺度間の相関係数

	1)	2)	3)	4)	5)
1) 特性的自己効力感					
2) 自尊感情	.618**				
3) 自己実現	.389**	.298*			
4) 向社会的行動	.269*	.022	.486**		
5) 援助規範意識	.216	-.158	.328*	.543**	

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

特性的自己効力感尺度と自尊感情尺度の間には有意な正の相関 ( $r = .618, p < 0.01$ )、自己実現尺度の間には有意な弱い正の相関 ( $r = .389, p < 0.01$ )、向社会的行動尺度の間には有意な弱い正の相関 ( $r = .269, p < 0.05$ ) がみられたが、援助規範意識尺度との間には有意な相関はみられなかった。自尊感情尺度と自己実現尺度の間には有意な弱い正の相関 ( $r = .298, p < 0.05$ ) がみられた。自己実現尺度と向社会的行動尺度の間には有意な正の相関 ( $r = .486, p < 0.01$ )、援助規範意識尺度の間には有意な弱い正の相関 ( $r = .328, p < 0.05$ ) がみられた。向社会的行動尺度と援助規

範意識尺度の間には有意な正の相関 ( $r = .543, p < 0.01$ ) がみられた。

## 4) ボランティア活動と各尺度との関係

小中高、及び大学におけるボランティア活動の有無と尺度との関係は表3である。ボランティア経験の有無について各尺度の平均値の差の検定を行った。自己実現尺度のみにおいて、小学校でボランティア活動をしていた者はしていない者に比べて平均値が有意に低く ( $p < 0.05$ )、その他の尺度においては有意差が見られなかった。

表3 ボランティア経験と特性的自己効力感尺度・自尊感情尺度・自己実現尺度・向社会的行動尺度・援助規範意識との関係

	小学校		中学校		高校		大学	
	ボランティア経験		ボランティア経験		ボランティア経験		ボランティア経験	
	あり (n=26)	なし (n=29)	あり (n=26)	なし (n=29)	あり (n=26)	なし (n=29)	あり (n=11)	なし (n=44)
特性的自己効力感	68.3 (± 11.6)	70.6 (± 10.8)	68.8 (± 10.2)	70.1 (± 12.1)	70.0 (± 11.2)	69.0 (± 11.2)	68.9 (± 11.7)	69.6 (± 11.1)
自尊感情	27.7 (± 5.4)	28.9 (± 6.8)	28.2 (± 5.9)	28.5 (± 6.4)	27.0 (± 5.5)	29.6 (± 6.5)	26.4 (± 6.5)	28.8 (± 6.0)
自己実現	36.2* (± 3.6)	38.9* (± 5.6)	37.8 (± 5.3)	37.5 (± 4.6)	37.9 (± 5.4)	37.3 (± 4.5)	38.9 (± 6.2)	37.3 (± 4.6)
向社会的行動	59.5 (± 13.2)	57.7 (± 20.1)	60.2 (± 15.0)	57.0 (± 18.8)	60.3 (± 16.5)	56.9 (± 17.6)	63.1 (± 11.3)	57.4 (± 18.1)
援助規範意識	102.5 (± 9.4)	104.4 (± 13.7)	103.1 (± 11.2)	103.8 (± 12.4)	105.8 (± 10.4)	101.4 (± 12.7)	106.4 (± 6.9)	102.8 (± 12.6)

\*p<.05

#### 4. 面接による個別インタビューの実際

個々人が「ボランティア」というものに対してどのようなイメージを持ち、なぜボランティアとして参加したのかを明らかにするために、病院のハンドベル・クリスマスコンサートに出演した8名（男性1名、女性7名）の学生に対して面接調査を行った。なお、代表的な面接内容を、学生の発言をそのまま以下に記述した。

<インタビュー>

##### 1) 参加動機について

学生1：「私もともと音楽とかそういう楽器を取り扱うことが好きなので、ハンドベルに興味を持ちました。J先生から誘われて、病院や団体さんのところに訪問できたらいいねって。私、今、子どもと触れ合うボランティアもしているんで、積極的にそういう活動ができたかと思っていたので、すごく私にとっていい機会だったので参加いたしました」

学生2：「今回のイベントは、小さいころにベルの演奏を生で見たことがあって、その時に心にすごく響いてきたことを覚えていて、身体が悪くてつらい人も沢山いると思うのですけれども、そういう人達にベルの演奏を届けられたら少しは元気になってくれたりすると思う。あと、私は人が元気になってくれたり、笑顔になることがすごく自分でも嬉しいので、人のためになれることがあったらなと思って参加しました」

##### 2) 社会貢献意識について

学生3：「社会に貢献するのが嫌という人もいるけど、嫌なタイプじゃない。ボランティアとかも高校の時にしていたので、社会貢献っていう響きは周りからいいようにみられる。人の目も良くなる。ベルとか病院で発表すると患者さんと接することも多くなるし、コミュニケーション力もつく」

学生4：「世の中の人たちの中で困っている人とか悩んで

いる人にちょっとでも何かできることがあれば、手助けすることが貢献することだと思う。例えば今回、病院でベルの演奏を患者さんに届けることも、患者さんに元気になってもらうことで貢献できたかなと思います」

##### 3) ボランティア活動の価値

学生5：「ボランティア活動することによって自分の知らない人と接したり、なんか、いろんなことすることで、視野も広がるし、それが、看護師になるための勉強をするうえで役に立つと思います」

学生6：「仕事ってなるとお金の関係も入ってきてそれぞれやる気になると思うけど、ボランティアはお金をもらえるわけじゃない。お金がなくても人のために行動できるっていう、人それぞれのその人の優しさ、というのも育つんじゃないかな、と思う」

## VI. 考察

### 1. 看護学生のボランティア活動の実態

学生は、小中高・大学を通してボランティア活動を体験している者が多く（40名；72.7%）、中央教育審議会の答申（豊かな人間形成、将来の社会参加、社会の中で生き抜く力、職業観の醸成等）が現場に根づいていると評価できる。しかし、大学1年次におけるボランティア活動の取り組みは少なく（11名；20%）、他の看護系大学においても同様であると推察できる。看護系大学生は、学年進行と共に看護師・保健師免許取得に向けて学習の量や質を深めていくため、ボランティア活動の継続は厳しい状況にある。しかしながら、そのような状況にあっても広く社会に目を向けたボランティア活動は必要であるため、可能な限り、1、2年次においてボランティア活動を支援することが必要ではないかと考える。



## 2. ボランティア活動が学生の自己実現の過程に及ぼす影響

### 1) 自己実現とボランティア活動との関連

学生は向社会的行動、援助規範意識の得点が高く、自己実現、向社会的行動、援助規範意識の3尺度間に相関があることが明らかになった。本学の学生は看護師になり、役に立ちたいという基本的姿勢をもっており、学びの中に他者への支援の重要性を理解していると考えられた。

### 2) インタビュー内容の分析

本文の発話記述について、橋本・石井(2004)が行った一般学生(教育学部)のボランティア活動(主なボランティア経験は、障害者施設の訪問、障害児宅訪問、兄弟時支援サークル、自閉症児宅訪問など特別な知識や技術を必要としない)調査との比較から、以下の考察を行った。

#### ①参加動機について(学生1と学生2)

学生は、誘われたり頼まれたりしたことがきっかけとなってボランティア活動に参加しており、あまり明確な意思をもっていなかった。しかしながら、他者のため、自分のため、あるいは自分の興味の充足や自己成長させたいという多様な動機を内在させていた。三島(2009)は、自己に関する理解の着実な進歩、とりわけ大切なことは良い人間になろうとする志望などという自己実現に向かって、自分の可能性を伸ばす過程がボランティアであると指摘している。他方、一般の学生は、他者のためになるという奉仕の精神が希薄であると言われていたことから、本学の学生はボランティアにおいて、他者への支援という価値をもち、自己実現への道を歩んでいると言えよう。

#### ②社会貢献意識について(学生3と学生4)

学生は、①で指摘したように誰かのために、他者のために役立つものとしてボランティア活動をとらえており、ボランティアへの奉仕性を肯定し、将来、看護職としての自己成長に役立つものと考えていた。他方、一般学生はボランティアの意義を自己の成長や経験のためと認識しており、自発性・自主性を重視していた。これらの相違は、所属学部等により影響を受けることが考えられよう。学生は、看護学を学ぶという目的に加えて、ボランティアを自己の求める職業性の構築に役立つものとして自己成長に繋げていると言える。

#### ③ボランティア活動の価値(学生5と学生6)

学生はボランティア活動に、誰かの役に立つこと、他者と多く接すること、視野が広がること、看護師という職業につくために役に立つ等の意味を見出しており、職業意識の醸成に関連する価値として位置付けていた。他方、一般学生が認識する実践・経験を与えてくれる機会であり、非日常的な体験を与えてくれるものとするボランティア活動の価値づけとは異なっており、学生は看護職につくという目的意識においてボランティアの価値を見出していたと推

察される。

### 【謝辞】

調査にご協力頂きました学生の皆さまに感謝いたします。また学生のボランティア活動を温かくご支援頂きました病院の理事長・職員の皆さま、学生に心からの声援を送って下さいました患者・地域の皆さまに心から感謝申し上げます。そしてハンドベル演奏に際しまして、ご指導・協力いただいた本大学の教職員の皆さまに深くお礼を申し上げます。

なお本研究は、学長裁量経費の助成を受けておこなったものである。

## 文 献

- 橋本鉦一、石井美和(2004). ボランティアと自己実現の社会学—その接合にみる言説・政策・理論・個人—. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 第53集・第1号, 109 - 114.
- 橋本鉦一、石井美和(2004). ボランティアと自己実現の社会学—その接合にみる言説・政策・理論・個人—. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 第53集・第1号, 87 - 119.
- 今田寛, 宮田洋, 賀集寛(1993). 心理学の基礎. 培風館, 116.
- 菊池章夫(2002). 心理測定尺度集II. サイエンス社, 180.
- 菊池章夫(2002). 心理測定尺度集II. サイエンス社, 178.
- 三島重顕(2009). 経営学におけるマズローの自己実現概念の再考(2) —マグレガー, アージリス, ハーズバーグの概念との比較—. 九州国際大学経営経済論集, 16巻(1), 97 - 125.
- 三島重顕(2009). 経営学におけるマズローの自己実現概念の再考(2) —マグレガー, アージリス, ハーズバーグの概念との比較—. 九州国際大学経営経済論集, 16巻(1), 101.
- 妹尾香織(2008). 若者におけるボランティア活動とその経験効果. 花園大学社会福祉学部研究紀要, 第16号, 35 - 42.
- 柴田和恵, 高橋ゆかり, 鹿村眞理子(2007). 看護学生の援助規範意識と職業的アイデンティティとの関連—臨地実習前後の比較—. 天使大学紀要, vol7, 87.
- 内田知宏, 上埜高志(2010). Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 第58集・第2号, 261 - 262.

【付記】本研究に利益相反関係は存在しない。

**Abstract:** *Relationship between volunteer activity and self-actualization in nursing student, and factors that affect self-actualization.* Journal of Nursing Science in Human Life, 1: 36-41 (2018) . Yasuko Kawano<sup>1)</sup>, Takaaki Kaminishi<sup>1)</sup>, Rie Kawano<sup>2)</sup>, Yukari Muraoka<sup>1)</sup>, Mizuho Manabe<sup>1)</sup>, Kana Kaminishi<sup>1)</sup>, Shiori Oba<sup>1)</sup>, Taeko Oka<sup>1)</sup>, Yasuko Okuda<sup>1)</sup>, Norihiko Asada<sup>1)</sup>, Saori Okame<sup>1)</sup> (Working group for volunteer activity<sup>1)</sup>, Faculty of Nursing at Matsuyama Campus, University of Human Environments and <sup>2)</sup> Faculty of Humanities, Mejiro University)

We investigated the situation of volunteer activities in nursing students, and clarified how the experience affects either license acquisition or self-actualization. For this, we conducted questionnaire and interview surveys. These surveys consisted of experience participating in volunteer activities and five different scales such as self-actualization, generalized self-efficacy, self-esteem, prosocial behavior, and normative attitude toward helping. 55 actual surveys and 8 interview surveys in the first grade of university students were carried out with informed consent. 40 students (72.3%) had experienced volunteer activities through periods from primary school to university. Only 11 students (20.0%) experienced volunteer activity for the first time in university. The average score in both social behavioral and normative consciousness scales was higher in volunteer students than that of general students. It suggests that volunteer experience may relate to facilitate social activity and self-actualization (self-growth) . Thus, it is important to promote volunteer activities as much as possible even in the nursing education course.

**Keywords :** Volunteer activities, Nursing student, Self-actualization